

「主に誠実な心」
列王記上 11 章 1-10 節

「ソロモンが老境に入ったとき、彼女たちは王の心を迷わせ、他の神々に向かわせた。こうして彼の心は、父ダビデの心とは異なり、自分の神、主と一つではなかった。」(4 節)。

ソロモンはダビデとは違った、と聖書は言います。ソロモンが「老境に入った時」とありますが、人間の体は年と共に衰えていきます。でも神さまへの信仰は年をとる度に磨かれていくべきものなのです、本来は。でもそうならなかった。それはソロモンが神の言葉に聞くことをしなかったからです。

最初の頃のソロモンはそれが出来ていました。ソロモンが王になった時、神さまに何でも願い事を言ってごらんとと言われて、ソロモンは「民を正しく裁くことができるように、善と悪を判断することができる聞き分ける心を与えてください」と願いました。つまり、最初のソロモンは、常に神の言葉を聞くことができるようにと願っていたのです。ところが、いつかそれを怠るようになってしまっていました。妻たちの言葉に心迷わせ、他の神々の方に向かってしまったのです。どんな難問にも立ち向かうことが出来た知恵者ソロモンだったはずなのに、偶像の神々に心を寄せる愚かさを知っているはずの男だったのに、そちらになびいて行ってしまったのです。

だけど、おそらくソロモンには、イスラエルの神を捨てたつもりはなかったと思います。相変わらず神殿で捧げものをささげていたでしょうし、まことの神さまを捨てたつもりはないと思っていたことでしょう。しかし彼の心はダビデとは違ったのです。

では、どこが違ったのでしょうか。主と一つになっていなかった、このところですか。ダビデも失敗をしました。大変な罪も犯しました。でも、ダビデは、失敗しても罪を犯しても、心から悔い改めてまことの神を見失うことがなかった。当然、他の神に歩み寄ることなどはしなかったわけです。しかしソロモンは、主以外の神を受け入れてしまった。ダビデとは違ったのです。

ソロモンの話には、ソロモンが悔い改めているという話が出てきません。そこがダビデとは違ったのです。またダビデにとって神は、天地の造り主である神お一人でした。しかし、ソロモンはダビデのように一途にはなれませんでした。よその神や、あるいは神以上に大切なものがあるという二心の状態になってしまったのです。このことは、まさに神さまへの反逆でした。十戒の第一の戒めは、「わたしをおいてほかに神があってはならない」とあります。ソロモンは、この最も重要な律法の違反者、一番守るべき律法の違反者になってしまったのです。

そのソロモンに対して、とうとう神さまが怒りを発せられました。あれほどの祝福を受け、神の栄光を見せていただき、直接言葉もいただいて、圧倒的な知恵と富と栄誉をいただいていたにもかかわらず、その神さま以外の神に浮気をし、偶像崇拜に陥ってしまったのですから弁解の余地はありません。しかし、神さまが裁きを与える時には、必ずその裁きの中に恵みの要素も入っているということを私たちは見逃してはなりません。今回の裁きに関しても二つの恵みの要素を神さまは与えてくださいました。

それはどんな恵みかと言うと、一つは、すぐには裁かれないという猶予が与えられていることです。そのことは、イスラエルの民のために少しでも裁きを先延ばしにするという神さまの愛でもあるし、またソロモンに対しては、彼に与えられた最後のチャンスであったのです。この裁

きが下される前に、主に立ち帰ってほしい、悔い改めてほしい、そう神さまは願っているのです。神さまだってソロモンを裁きたくはない。あれだけべた褒めして、ソロモンのことを愛していたわけですから。そして二つ目の恵みは、もしソロモンが一つ目の恵みの間に悔い改めることができなく最悪の結果になってしまったとしても、それでも王国全部は引きはがさないとする神さまの憐れみです。ダビデのゆえに、彼の子孫に一つの部族を残すというのです。

神さまはどんな時にも、たとえ私たちが取り返しのつかないような罪を犯したとしても、神さまは私たちに憐れみをかけてくださる。その恵みのもとに悔い改めてほしい。神が求めるのは、いつでも私たちが神さまのもとに立ち帰ることです。滅びではないのです。そのことを今日の聖書を通して覚えたいと思うのです。

今年も、もうすぐ 8 月 15 日がやって来ます。人間は誰しも罪を犯してしまう者たちです。間違わない人は一人もいません。私たちは、過去に戦争という過ちを犯してしまいました。また、今現在でも、なおウクライナやガザで戦争をし続けてしまっています。私たちは、起こしてしまった過去を変えることは出来ません。しかし、未来を変えることは出来ます。罪に気づき、罪を悔い改め、未来をより良い方向に向けることは出来るのです。私たちは、愛と赦しによって、和解と一致をもたらしてくださる平和の主に望みを置きつつ、この日を迎えたいと思います。